

# 第38回 教科指導 研修会

レポート  
あすなる学園  
寺田圭吾



元 pre-international school 講師の山崎美恵子先生に「こうすれば、すぐに英語が出てくる」と題して、ワークショップ形式を取り入れて研修をしていただきました。

まず、英語での先生自身の自己紹介の後、我々も英語で自己紹介。普段は偉そうに生徒に指導している身ですが、いざ話すとなると、中 1 レベルの話しかできず、恥ずかしい。

## 1. 英語で質問

先生が What's your name? What is your favorite singer? のような質問をされ、それに対して英語で答えていくという練習。

## 2. 英語で質問をする

隣の人からの質問に答えて、反対側の隣の人に英語で質問。

## 3. 語句の置き換え練習

やや短めの文で、その一部を別のものに置き換えて言う練習。

I am an American. → he で → He is an American. → Japanese で → He is a Japanese.

## 4. 語句の置き換え練習 (発展)

長めの文で、3と同様に。

Will you tell me the way to the station? → the post office で →

Will you tell me the way to the post office?

## 5. Phonics Chants

「ア、ア、apple」のようにリズムにのって、a で始まる単語 → b で始まる単語 → …

Phonics は習うと読めるようになってくるので「できるようになった」という成果が見えやすい。だから、子どもたちにやる気を持たせやすい。また、保護者にもアピールできる。

## 6. フラッシュカード (文字付き)

カードにいくつかの職業の絵が描いてあり、まずそれを覚えてから、それぞれの絵を見せられながら What do you want to be in your future? — I want to be ~. の練習。発話の練習ではあるが、読めなくてもカードには文字を書きおき、その文字が少しでも印象に

残るようにしておくことも以降の学習につながっていくとのこと。

### 7. カルタ取り

6で使った、職業の書いてあるカードを並べ、英語でのヒントを聞きながら、そのカードを取る。すべての単語が聞き取ろうとするとわからなくなるので、とにかく、キーワードを拾っていき、答えを絞っていくように心がける。ここでも、やはり、日本語を経由させず、英語のまま、ということが大切で、それに慣れさせるアクティビティである。

### 8. 替え歌

London Bridge の歌詞を月の名前にして、歌って覚えさせる。歌いたかったけれど、この日の出席者の年齢層が高かったので（スミマセン）、先生が気を遣われて、歌はありませんでした。このほかにも、いくつかの替え歌を作っておられるとのこと。

### 9. Indian Porker

各自にカードが配られ、自分のカードだけ見えないように頭の上に持ち、他の人たちのカードを見て、そこにはない自分のカードを当てるというもの。この日は月の名前を使って、行いました。



徐々に生徒になり、楽しく授業を受けました。プレスクールの子ども、幼児対象の指導法をもとに、当日は我々用にアレンジもしていただき実践してもらいました。「日本語で考えさせず、とにかく英語をしゃべらせる。」という考えで行っていただけることで、1～4は中学生でも十分使える。置き換え練習は、単純に語句だけの入れ替えなら、反復練習として使えるし、主語を置き換える問題などは、文法の知識定着に使える。さっそく、書き換え練習は、自塾の授業で使わせてもらっている。さらに、中学生用にアレンジして使ってみたい。

カードを使うアクティビティは、自塾の小学生英語でやっている。英語のまま理解させるには、絵を使った教材が有効なのは間違いない。中学生にも、絵が入ったカードを使うと、イメージと結びつきやすく効果的だと思うが、各文法単元にそった市販のものがないので、自分で作るしかないか…。

英語は、いろいろな指導法が考えられる。どのようにして、楽しく英語に触れさせて、使わせるか。そして、身につけさせるか。この研修で、その多くのヒントをいただいた。

英語教育に関しては、我々が英語を習ってきた文法重視のものから、「聞く、話す」が重視されるようになり、センター試験ではリスニングが行われるようになった。そして、2020年度から大学入試が大きく変わる。指導要領が変わるだけでは変わらなかったが、今度は、高校でも中学でも、大学入試で重視されるものに合わせて変わってくるだろう。

日常的に英語を使うことのない我々が、限られた時間内に外国語を身につけるためには、nativeとは違った方法でないと無理なのではないかと、個人的には思っている。毎日、英語を話すということは無理だとしても、各生徒が日常的に英語を聞くという環境を作ることが大切だろうと思う。やはり、英語に興味を持たせ、好きにさせるということが第一だろう。それが難しいのだけれど、これからも、さらに探りながら考えていきたい。

地球塾 中村 勲



本丸大芝生 奥が天守台

「家康の国土プランナーとしての一面を学びたい」という案内の1フレーズに触発され、春の都を訪れた。4月10日、九段下で集合。まずはビルの谷間に鎮座する「築土（つくど）神社」に向く。平将門と縁のある神社だそう。その後、武道館を左に見て皇居東御苑に向かう。案内役は沼田先生。歴史に造詣が深く、丁寧な説明で分かりやすい。うす曇りの天気でウォーキングにはちょうど良い。桜もまだ満開のものもあり、楠の巨木やケヤキなど萌えいずる新緑の中、春の楽しいひとときを過ごすことができた。

### 巨大な天守台

北桔橋門から入ると、巨大な石垣が目に入った。天守台である。立方体の巨石を積み上げているように見え、その大きさに圧倒される。かつてこの天守台の上に大きな天守閣がそびえていた。今はもうなく、見ることができない。当時の天守閣の高さはなんと45m、これは現在の天守閣で1番高い大阪城の天守閣の高さ(37.5m)よりもずっと高く、天守台の14mを合わせると59mあり、20階建てのビルの高さに相当するそうだ。江戸城は天守閣で敵を威圧し、富士見櫓、富士見多聞などの防衛施設で敵の侵入を防ぐ、まさに鉄壁の守りでかためていたのである。

しかし、そんな天守閣も明暦の大火で焼失し、そびえていたのはわずか50年ほどである。また、鉄壁の守りで敵の侵入に備えた設備も実際に使う場面がなかった。戦国時代が幕を下ろし、大きな争いは姿を消すことになる。領地拡大を競った戦国大名たちは徳川幕府に忠義を示し、地方の支配で満足之余儀なくされた。江戸時代のように、武士政権として260年以上統治できたのは世界史的にも稀だそうだ。

### 江戸が中心地であり続けた理由

大きな戦乱もなく、天下泰平の世の中を築くことができた、その理由は何だろうか。第1に徳川幕府の財政基盤が強固だったことがあげられる。全国の38%を徳川家の領地にし、さらに、金銀の諸鉱山や大阪、長崎の主要都市を直轄した。第2に諸大名の勢力を弱めたことがあげられる。参勤交代と城の築造や治水工事を各大名に命じる天下普請(御手伝普請)などがそうである。しかし、1番大きい理由は幕府を京都や大阪ではなく、江戸の地に置いたことではないか。本丸から



天守台

二の丸に降りていくところに「汐見坂」と名付けられた坂がある。当時の江戸城はすぐそばまで海が迫っていたそうだ。その坂の上に立ち、400年前の光景と家康の描いた未来図を想像してみた。

徳川家康が初めて江戸の地を踏んだのが1590年。秀吉の小田原攻め以来、家臣であった家康は秀吉にこの関東の地をまかされる。当時の関東平野は水はけが悪く湿地帯が多かった。

農作物をつくるには適していない不毛の地であった。関東への移封は左遷に等しかった。家康の力を危険視し、彼の力を削ぐ意図が秀吉にあったのではないかとされている。家康の家臣は肥沃な東海地方から希望のない関東に移ることに愕然としたそうだ。

### 関東は「希望の地」

家康の考えは正反対であった。家臣と違い、彼にとって関東はまさに「希望の地」であった。一体ぜんたい、作物がとれない、頻りに洪水が襲うこの湿地帯をなぜ未来があると考えたのだろうか。それは、まさに逆転の発想からであった。当時、利根川は今の東京湾に流れていて、しばしば、洪水を引き起こしていた。洪水を起こすほどの大河川というのは流域面積も大きい。流域面積が大きいほど森林が豊かであり、飲み水や農耕に必要な水源が豊富である。家康はここに目をつけたのだ。一方、都のある近畿の山林は伐採され続け、荒れ地と化し、京の都は水道も下水道もなく不衛生な状態だった。そんな京都や大阪にもはや未練はなかった。家康は手つかずで、無尽蔵の森林エネルギーのある関東の平野に己が未来、徳川家の未来をかけたのである。エネルギーを制する者は世を制す。彼には未来を見通す先見の明があった。やはり家康はただものではなかったのである。



百人番所

家康が最初に着手したのは、家臣の住まいを確保することと、湿地を肥沃な水田地帯へと変える工事である。まずは神田山を削り、日比谷の入江の埋め立てを行い、武士たちを住ませた。それから、洪水を引き起こす利根川を銚子の方に東遷する大工事に着手し、洪水地帯を農耕地に変える大事業を開始した。人が大勢生きるためには飲み水も確保しなければならない。「玉川上水」や上水用の「溜池」を整備し、それを江戸の人達の命の源とした。江戸は家康が入府する前は葦が群生する荒野であったが、その後、百万の人々が住む大都市にふくれあがる。治水や土木工事は困難を極めたが、このインフラ整備を徹底したからこそ、江戸は日本の中心であり続けたのではないだろうか。

本丸の大芝生からなだらかな坂を下りる。途中、大番所や百人番所の前を通る。「今のガードマンの詰め所のようなものでしょうね」と沼田先生が解説してくれる。大手門を通り過ぎると、お堀の水面が手の届くほどの距離になっていて、橋を渡り始めると、しだれ桜の花びらと若草色の新芽が寄り添うように風にゆれていた。また訪れたい場所である。



※5月の全国総会で全国会長に沼田広慶先生(北辰館スクール), 東日本ブロック理事長に内藤潤司先生(ソロモン総合学院)が新たに選出されました。

←7月8日(金)拡大理事会が開かれ、秋からの活動内容の検討と確認事項などが話し合われました。

9月4日(日)山本太志先生に東日本ブロックから来ていただき英検指導についてのセミナーを予定しています。

10月以降の研究会などはいくつか案が出て検討されたが決定には至りませんでした。

また塾保険について村田先生からまとめて業者と交渉することが提案されました。

【編集後記】 中村先生の「江戸城跡を歩く」の原稿を早くに送っていただきながらうっかり5月の通信に載せるの忘れて今号に掲載する次第です。ご容赦ください。

地元で中学で理科や社会の進度が数年前と比較してどんどん遅くなっています。中3の社会なんか歴史が終わるのに2学期中かかりそうだとか。公民はどうするつもりなんでせうか。このごろ学校の先生はどうなってるんでしょうか？ I塾 平野芳英